

氏名	たんげかずひこ 丹下和彦
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第481号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	悲劇の世紀

——前5世紀アテナイ精神史としてのギリシア悲劇——

論文調査委員 (主査) 教授 中務哲郎 教授 高橋宏幸 教授 内山勝利

論文内容の要旨

本論文は前5世紀、殊にその後半に隆盛を極めたギリシア悲劇の上演活動をポリス・アテナイにおける一つの精神運動と捉え、約1世紀に亙るその足跡を残された上演台本の中に辿ろうとするものである。劇作品を考察の対象とする場合、本来は上演というパフォーマンスも含めた総合的な扱いがなされるべきである。しかし2400年以上の昔と同じ環境、同じ条件で演劇としてこれを鑑賞し受容することは、われわれには不可能である。かつては劇場で上演された劇を、われわれは単なるシナリオとして読むことになる。劇作品を、演劇にとっては最も重要な上演ということ抜きで、すなわち見ることを抜きにして、読むという行為だけで受容しようというのである。それは逆に言えば、ギリシア悲劇の文芸性、芸術性、シナリオそのものがもつ精神性を、とにかくはまず読み取ろうとする行為である。異論の余地はあろうが、古代ギリシアの悲劇を考察の対象とする場合、これが許される最善の方法であろう。かくして本論文においてはまず作品のもつ文芸性、精神性の抽出に主眼が置かれる。もちろん、できる限り演劇的諸要素も考察に加味されることになる。

本論文の構成は以下のとおりである。まず序章においてギリシア悲劇の歴史が概観される。以下10章に亙って計12篇の作品が取り上げられ、詳細な作品解釈を通してその文芸性、精神性の抽出が試みられる。もちろんその際に、各作品成立時のアテナイにおける政治・社会・文化を含めた全体的な状況が考慮に入れられる。そして、終章において作品解釈の総括と、そこから導き出される結論が示される。

序章 ギリシア悲劇概観

本章においてはギリシア悲劇の全体像が概括的に示される。叙述の中心は前5世紀におけるジャンルとしてのギリシア悲劇の発展史である。ディテュランボス(ディオニュソス讃歌)に始まるとされるギリシア悲劇がテスピスの革新を経てアイスキュロスらに受け継がれていく経緯、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスらによる形式上の改良と作品の質の向上、劇場の整備、市民の積極的関与等々の考察を通して、ギリシア悲劇のもつ宗教性、社会性、文芸性が解説される。中でも文芸性こそ後世の人々の受容の核となり、また夙にアリストテレスが『詩学』において取り上げ、その悲劇論としたところのものに外ならない。論者のギリシア悲劇理解は、まずこの文芸性の抽出に始まる。以下の作品研究はそれを各作品の中に探求し、さらにそこに前5世紀アテナイ市民の精神性をも読み取ろうとするものである。

第1章 アイスキュロス『ペルシア人』—自由の概念—

本章では、自由の概念がアテナイ市民、ひいてはギリシア人にどのように捉えられていたかが考察される。自由が法、勇気、知と並んで前5世紀のギリシア人にとって自らの民族性を示す重要な価値観であったことはヘロドトスの記すとおりであるが(『歴史』7.102~104)、2度に亙るペルシアの来寇が殊にその意識を高めた。本篇は、悲劇創作の慣例に逆らってペルシア来寇という当代の事件を題材としている。そこでは敵国ペルシアと自国ギリシアとの政治・社会制度の相違対立が浮き彫りにされ、自由の概念の有無こそ勝敗を決定する鍵となるものであったことを、劇は告げている。自由ギリシアに共感を寄せるアテナイ市民は、本篇に優勝の栄誉を与えた。

第2章 アイスキュロス『オレスティア』3部作—法の正義—

法の概念もヘロドトスによれば極めてギリシア的な価値観である。『オレスティア』3部作でアイスキュロスが描いたのが、その法の概念が往古のギリシア人社会において認識され制度として確立する過程であった。まず第1作『アガメムノン』で暗殺が、第2作『供養する女たち』で復讐が、そして第3作『慈しみの女神たち』では母殺しの罪を救済するための裁判制度の導入が描かれる。家長アガメムノンを失った継嗣オレステスは、古い氏族社会の力の正義の論理に従って復讐を企てるが、その相手が母親であったことが新たな問題を提起する。正義の行使に対置される母殺しの罪の問題である。母の怨念の化身(=己の良心の呵責)エリニュエスの追求を受けたオレステスは、アテナ女神の主宰する裁判で無罪放免となる。かくして力の正義の行使による復讐の連鎖が終息をみる。代わって法の正義がここに確立され、新たな市民共同体の秩序を律することになる。アイスキュロスは父祖伝来のアルカイズムの克服と市民社会の到来を、法の概念の確立過程を通じて描いたのである。

第3章 ソポクレス『アンティゴネ』—人間讃歌—

この劇では「神の法 vs. 人間の法」という対立項をめぐって、アンティゴネという一人の女性の生のあり方が王クレオンとの確執を通して描き出される、というのが従来の解釈であった。しかし論者によると、この劇は、人間の法に抗して神の法に殉じた(英雄アンティゴネ)を一途に賛美するもの、ではない。ここに描かれているのは、自らの信念を貫いて短い生を全うする強いアンティゴネではなく、むしろ生の世界に未練を残す弱い、人間味溢れるアンティゴネである。それは2度の埋葬行為、コンモスでの強い嘆きの表出、572行のハイモンへの愛情表明(572行はアンティゴネの科白とする)、そして何よりもアンティゴネがハイモンの婚約者と設定されている事実によく表されている。人間らしく生きることを何よりも欲したギリシア人にふさわしい人間讃歌として、本篇は読まれうるのである。

第4章 ソポクレス『オイディプス王』—自立する知—

知がギリシアの伝統的価値観の重要な一角を占めるものであることは論をまたない。自然の猛威を知の力で克服し文明化の象徴となったオデュッセウスとは違った意味で、人間存在そのものの解明を追求したオイディプスもまた知の人と言わなければならない。ライオス王殺害犯人探索を緒に、その知的追求は自らの出自にまで及び、その果てに知らずして犯した過去の罪業が暴露されるに至る。そしてそのあと彼は罪の意識に駆られても自裁することはせず、己の知の未熟さを恥じて自らの手で両眼を潰し、自らの意志で故国を追われる。それは、その身こそ神の造ったこの世界の秩序の中に取り込まれてはいるものの、その精神はあくまでも人間としての主体性を貫こうとする態度に見える。そこには前5世紀中葉のアテナイ人の不屈の知的探求心と、己の有する知性への誇らかな讃歌が見て取れる。

第5章 エウリピデス『メデシア』—情念の奔流—

アテナイの前5世紀が啓蒙の時代、科学的思考に彩られた理性の時代であることは、自然哲学者と称される人々の陸続たる登場で証される。アテナイの文化の発展に彼らの果たした役割は大きい。その一方でしかし人間の行動のすべてが理性のみで説明しきれぬものでないこともまた事実である。理性に対する感性も人間存在を表徴する重要な要素である。啓蒙の時代にあってその感性に刮目し、感性の暴発によって引き起こされる悲劇を書き綴ったのがエウリピデスである。本篇はその代表的な一篇といってよい。夫に裏切られたメデシアは、その復讐にわが子を殺す。それが最も効果的な復讐方法であったから。同時にそれは人倫に悖る行為でもある。メデシアは躊躇逡巡のあげく、しかし子殺しを敢行する。その原動力となるものはテューモス(激情)である。人倫に悖る行為と知りながら激情に負けて犯してしまう。理性が感性に凌駕される。人間である以上自然なことであるが、前5世紀のギリシア人もまた何よりもまず人間であったのである。

第6章 エウリピデス『トロイアの女』—時代を撃つ—

前416年夏から冬にかけて起きたメロス島事件は、アテナイ帝国主義の犯した蛮行として心ある市民に衝撃を与えた。その市民の一人エウリピデスが示した反応が本篇の執筆上演である(事件と上演との時間的關係をどうみるかによって本篇のもつ時事性の濃淡が変わってくるが、本論では両者の関係を全く無視する立場は取らない)。しかしこの劇は単なる反戦劇と捉えて終わる体のものではない。敗戦直後のトロイアの婦女子の惨状の執拗な描写は、単純な反戦キャンペーンを突き抜けた人間性の悪なるものへの告発であると見なされるべきである。作者は時代を撃ち、そのことによってまた時代を越える普遍性を獲得しているのである。

第7章 エウリピデス『ヘレネ』—病める知—

この劇でエウリピデスは、おそらくはステシコロスに倣って〈エジプトのヘレネ〉という異伝を劇化した。夫婦の再会と危地脱出というロマンス劇的要素を多分にもつ本篇に、しかしわれわれは前5世紀末期のアテナイ社会に瀰漫していた知の衰退化の実態を見て取ることができる。それは事物と名称の乖離という現象となって現れてくるものである。病める知は事物を的確に捉えることができない。このことはすでにトゥキディデスが指摘していたところであるが、エウリピデスはトロイアのヘレネが大地から造られた実体のないものであったとの異伝を用いて、これを寓意的劇作品としたのである。

第8章 エウリピデス『オレステス』—無頼な逃走—

母殺しの罪に心病み、またアルゴス市民から死刑を突き付けられたオレステスは、その二つの危機からの脱出を企てるが、紆余曲折の後結局はピュラデスとのピリア（党派的連帯意識）によるアナーキーな逃走にまで至る。共同体の秩序・法を無視するこの無謀な党派的行動は、これまたトゥキディデスの指摘する内戦下アテナイの末期的症状に外ならなかった。知の衰退化現象がここにも顔を覗かせている。

第9章 エウリピデス『バックスの信女』—ギリシア的なものと非ギリシア的なもの—

アジアからバックス教がテバイの地に襲来し、王ペンテウスはこれに翻弄されたあげく母の手によって殺される。一見政治と宗教の対決に始まる本劇は、その実ペンテウスの賢しらな人知・人工的な知〈ト・ソポン〉が自然の叡知〈ソピア〉に打ち負かされる様相を描く。衰微したギリシア的理性が、法も知も、内在し外在する非ギリシア的なもの前に膝を屈していく有り様を、エウリピデスは遠くマケドニアの地から凝視していたかのごとくである。アテナイの黄金時代がかくして終末を迎える。

第10章 エウリピデス『キュクロプス』『オレステス』『バックスの信女』—法秩序への反乱—

この3作品では、従来ギリシアの伝統的価値観とされてきたもの、とりわけ法の概念が、アテナイ人の心の中で衰退し失墜していく様相が描かれている。殊に『キュクロプス』では、それがグロテスクなまでにカリカチュア化されている。このサテュロス劇が単なる笑劇でないことは明らかである。

終章 精神史としてのギリシア悲劇

上の10章のタイトルに添えられた副題は、そこで取り上げられた作品のテーマ、いわば作品に盛られた精神として読み取られたものである。これを通観すると、そこには自ずと前5世紀100年間のアテナイ市民たちの思いの跡が読みとれる。詩人は時代の流れの中で常に現実を直視しながら、その作品の中に主体的に生きる人間像を構築せんとした。観客である市民もまた上演活動に積極的に参加した。この共同作業こそ前5世紀ほぼ100年間のアテナイの精神の流れを具現するもの（少なくともその一つ）に外ならない。今に残された悲劇33篇はこの共同作業の成果の一端である。ヘロドトスやトゥキディデスが散文の形で書き記したものを、悲劇詩人たちは劇場空間の中で表現しようとした。現存する作品はそのエッセンスの一部でしかないが、当時のアテナイ人の精神の流れを十分に伝えてくれている。本論文は、現存するギリシア悲劇から前5世紀アテナイの精神史を読みとり、ひいては人間性（humanitas）の発露の歴史をそこに見ようとする試みである。

論文審査の結果の要旨

ギリシア悲劇は紀元前6世紀後半に興り、5世紀の間に千をもつて数えるほどの作品が生み出されたが、406年のソポクレスの死と共にその実質的な生命を終えた。この5世紀はまた、アテナイという小さなポリスがペルシア戦争に勝利することにより繁栄の極みに達し、史上稀に見る文化的遺産を残しながら、27年に及ぶ内戦の末に没落していった100年でもある。本論文は、これまで悲劇研究の分野で大きな成果を上げてきた論者が、時代を映す12篇の悲劇を詳細に分析することを通して、アテナイ100年の精神史を描こうとする試みである。

ギリシア悲劇は科白の他に歌と踊りが占める割合も大きく、何よりもまず劇場で見て楽しむものであったから、見る芸術から精神史を読みとることができるのか、という疑念が湧く。そこで論者はこの作業を支えるのにふさわしい指標を見つけた。ギリシア人はギリシア語を話さぬ異民族をバルバロイと呼んだが、小さなポリスに分かれて王も支配者も戴かずに暮らしていたギリシア人が、東方の大帝国ペルシアの侵攻を受けた時、自分たちとペルシア＝バルバロイとを分かちつものは法と自由と叡智と勇気である、と明確に意識するようになった（ヘロドトス『歴史』7巻102章以下）。論者はこのうち法と自由と叡智が三大悲劇詩人の作品の中でどのように扱われているかを跡づけることにより、悲劇解釈に基づく精神史という

構想を成功させた。

第2章「アイスキュロス『オレスティア』3部作—法の正義—」と第8章「エウリピデス『オレステス』—無頼な逃走—」を並べて読めば、論者の方法が最も鮮やかに浮かび上がる。『オレスティア』3部作(458年)はトロイアから凱旋するアガ멤ノンを妃と情夫が謀殺し、オレステスが父の仇討ちのため母親を殺害、母の怨霊に責め苛まれるがアテナ女神の法廷で赦される、という物語をドラマ化したものである。血の復讐が正義であった時代にいかにして法の正義が確立されたか、3部作はその過程を描くとするのが通説であるが、論者はさらに一步を進めて、それはアテナイ人が自らのアルカイズムを克服し、知を行動原理に選び取る過程に他ならないと説く。一方エウリピデスの『オレステス』(408年)では、民衆裁判で死刑を宣告されたオレステスは、法を破って逃走する。アイスキュロス作品のオレステスはアポロンの命令に従い躊躇うことなく母親を殺し、母の怨霊からは神々によって救われた。一方エウリピデスにおけるオレステスは、母親殺しが恐ろしい罪であることを自らの知で意識する。この意識はアポロンが与えたものではなくオレステスの心の中から生じたものであるだけに、アポロンにも救うことができない。ここには神の支配から自立したものの自覚することの苦しみを背負いこんでしまった人間がいる。二つのオレステス像の比較から50年を隔したアテナイ人の精神の変容を説く論者の手際は見事である。

第3章「ソポクレス『アンティゴネ』—人間讃歌—」。この劇では、国禁を犯して兄の遺体を埋葬し昂然と刑に服するアンティゴネが、劇後半に至って結婚もできずに死んでいく我が身の非運を嘆くので、その性格の分裂が問題とされてきた。これについて、死へと傾斜しながら生にも繋ぎ止められ、強さと弱さを併せ持ったアンティゴネ像が劇を一貫しており、そのような人間のあり方を劇で謳い上げたことこそソポクレスの功績であった、とする論者の分析は明快で説得的である。なおまた、劇中アンティゴネと婚約者ハイモンは一度も顔を合わすことがないにもかかわらず、二人の深い思いは通い合っており、この劇を若い二人の愛と死の物語と見ることもできる、とする指摘は新鮮である。ギリシア文学はいつ若い男女の恋を発見したかという問題についての新説と言えるであろう。

「アイスキュロス『ペルシア人』—自由の概念—」「ソポクレス『オイディプス王』—自立する知—」「エウリピデス『ヘレネ』—病める知—」「同『メデア』—情念の奔流—」「同『バックスの信女』—ギリシア的なものと非ギリシア的なもの—」等の諸章は副題がよく内容を表しているが、いずれも悲劇の解釈が精神史を紡ぎ出し、精神史の視点がテキスト解釈を深めていると評しうる。アテナイ人の精神は5世紀の前半に劇的に高揚し、この世紀後半のペロポネソス戦争を契機に衰退していったとする論者の図式に対して、アルカイック期(8~6世紀)から古典期(5世紀)にさしかかったアテナイ人は、新しい人間となるべく5世紀の全体を通して悶え苦しんでいたとは考えられぬか、との意見が調査委員から出されたが、論者は今後の研究でこの問いにも答えてくれるであろう。

以上、審査したところにより本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年1月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。